慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ことばと世界のつながりについて
Sub Title	Correspondence between words and reality : reference, truth and causal relations
Author	石黒, ひで(Ishiguro, Hide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.125- 141
JaLC DOI	
Abstract	This paper defends the traditional view that words can refer (and not only language users do so), and that the reference of words are essentially linked to the understanding of sentences in which they occur. It examines certain issues involving the concept of reference reflected in three views that have been aired in recent years. 1) The revival of the so-called Russellian thoughts by Gareth Evans and John MacDowell, namely that a person's thinking that he has a thought about a particular object does not guarantee that he has one. They have claimed that certain causal relations with the object has to obtain between the language user and the object, in addition to the correct use of a singular proposition to think about it. 2) The belief that, singular propositions containing proper names, as well as propositions with names of natural kinds, play a special role in linking language to the world, and that this is so because of a causal story involving the naming event and the subsequent handing down of the correct use of the name. 3) The negative view expressed more recently by Putnam and Davidson in different ways that since we have no guarantee that words can succeed in referring to a determinate object, one should do without reference; and the linked (but, actually not related, negative view), that reference presupposes a confrontation of a object identified independently of any conceptual system with our language and thought, a view implied by Putnam and Rorth. If reference implies such an impossible correlation, we would naturally have to cast aside reference. The paper tries to show that reference does not, and cannot imply such a confrontation of language with objects presumed to be identified independently of any conceptual system, and that causal links have little to do with reference. We claim that one can fix the identity of the object designated by a name or any singular term more and more precisely, by using general propositions. This does not entail that these general propositions give the sense of the name. The possibility that the same natural kind word could refer to a different stuff in a different possible world does not show that it is an additional causal link that enables us to refer to the actual natural kind, or that the inadequacy of the causal theory should make us give up reference. If we hold on to our belief in access to reality and to truths, then we cannot give up reference as Davidson suggests we do, in his 'Reality without Reference' of 1977.
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Treatise
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことばと世界のつながりについて

石　黒　ひ　で*

Correspondence between Words and Reality: Reference, Truth and Causal Relations

Hidé Ishiguro

This paper defends the traditional view that words can refer (and not only language users do so), and that the reference of words are essentially linked to the understanding of sentences in which they occur. It examines certain issues involving the concept of reference reflected in three views that have been aired in recent years. 1) The revival of the so-called Russellian thoughts by Gareth Evans and John MacDowell, namely that a person's thinking that he has a thought about a particular object does not guarantee that he has one. They have claimed that certain causal relations with the object has to obtain between the language user and the object, in addition to the correct use of a singular proposition to think about it. 2) The belief that, singular propositions containing proper names, as well as propositions with names of natural kinds, play a special role in linking language to the world, and that this is so because of a causal story involving the naming event and the subsequent handing down of the correct use of the name. 3) The negative view expressed more recently by Putnam and Davidson in different ways that since we have no guarantee that words can succeed in referring to a determinate object, one should do without reference; and the linked (but, actually not related, negative view), that reference presupposes a confrontation of an object identified independently of any conceptual system with our language and thought, a view implied by Putnam and Rorty. If reference implies such an impossible correlation, we would naturally have to cast aside reference.

The paper tries to show that reference does not, and cannot

* 慶應義塾大学文学部教授（哲学）

imply such a confrontation of language with objects presumed to be identified independently of any conceptual system, and that causal links have little to do with reference. We claim that one can fix the identity of the object designated by a name or any singular term more and more precisely, by using general propositions. This does not entail that these general propositions give the sense of the name. The possibility that the same natural kind word could refer to a different stuff in a different possible world does not show that it is an additional causal link that enables us to refer to the actual natural kind, or that the inadequacy of the causal theory should make us give up reference. If we hold on to our belief in access to reality and to truths, then we cannot give up reference as Davidson suggests we do, in his 'Reality without Reference' of 1977.

1. 序

哲学者は時折ことばと世界の繋りについて語ってきた．たとえば，デ・ディクト (De Dicto) の考え，つまり記述どおりに物をえ捉る考え，とデ・レ (De Re)，つまり，その物自体についての考えを識別する場合である．固有名詞や指示代名詞を用いることによって，我々はどのものについて考えているかを把握し，デ・レの考えをもつ，と説かれた．固有名詞の場合は，その使用法が，名が特定の人や物に当てがわれたときから「まともな伝達の方法」で，継承されると，その物や人と繋りを保つ．「銀」とか「水」といった自然類の場合も，その物が名づけられたとき，名づける人がそれを識別するのを可能にする様な，知覚経験が生じるという因果関係が，類のサンプルとその人の間に存在し，それ故に，名がそのものを指示する様になったのだ，などと，20 年ばかり前には一部の哲学者が盛に主張した.[(1)] 指示代名詞の場合は，人がそれを正しく使う度ごとに代名詞が指すものと，話者との間に知覚という直接関係がなければならない，などとも，18 世紀の経験主義以来説かれて来た．後で見る様に，その様な因果関係が，話者と指示される物との間に存在しなければならぬか否かにも疑問がある．しかし，たとえその様な認知関係が指示されたものと話者の間にあったとしても，そのこと自体，ことばとものとの間の繋りが出来たことを何等保証

しないのである.

この様な指示と因果の関係に関連して，肯定的な考えが二つと否定的な考えが一つと，三つの刺激的な言語哲学説が最近唱えられた．肯定的な一つ説は，ガレス・エヴァンスや，ジャン・マクドウェルなどによる，いわゆる『ラッセル的思考』(Russellian thought) つまり，対象依存思考 (object dependent thought) の再評価，そして復活である[2]．我々は，一体どのものに就いて考えているか知っていなければ，あるものについての考えを持つことが出来ない．この為にはそのものを全てのものから識別出来なければないから，そのものと，直接の認知的関係に立つことを意味する，というわけである．ラッセルが感覚所与（センス・データ）に関する判断について言ったことを，エヴァンスは，個物や人についての或種の思考にも拡げた．たとえば，私は山田太郎に度々出遭い，山田太郎のことを考えていると自分で思っているとする．たとえば，山田太郎は勇敢だ，と．所が，私が山田太郎と遭ったと思っているときの半分は，実は私は気が付かずに，山田太郎の双子の兄弟に，遭っていたのだとする．エヴァンスによると，私はこの場合，一人の人間について考えているのではない．二人の人間から得たインフォメーションをごちゃまぜにして，勇敢な虚構人物を構築した．私が実は知覚したのは二人だったのだから，私が「あの人」と度々思ったとき，一人の人間についての考えではないのだというのである．又，私が壁を眺め蜘がいると思い，その蜘について考える．ところが実は蜘などはいず，壁の汚れを私が，蜘と見違えたのである．そのとき私は知覚したその蜘などないのだから，エヴァンスの説にしたがえば，私の考えは特定の蜘についてのデ・レの思考であるわけはなく，したがってその蜘についての考えではない，ということになる．因果的条件が成立しなければ，私が「それ」と指示代名詞を使っても，何も指示するのに成功しない，というわけだ．こういう思考があるとすると，これはブレンターノ以来，常識となって来た，指向性によって思考は同定される，という考え方を覆すことになる．

自分は一人の人間，又は一匹の蜘について考えている，と意識しているのに，実はそうでないこともありうる，というのである．このエヴァンス・マクダウェル説は，色々問題があり，提供された形では受け入れられぬとは思うが，我々の先入見を再検討させる挑発的な考えである．しかし，私はこの小論では，紙面の関係で，その考えについては論じないで，より多くの疑問を私に抱かせる指示と因果関係にかかわる他の二つの広く持てはやされている説について考えて見たい．一つは，ことばと世界は単称命題を通して繋る，という説であり，他の一つは，単称命題がもし，ことばを世界の特定のものと繋げる特別な役割を演じないならば，ことばで実在するものを指示出来るなどという考えを放棄するべきだというローティーの考え，又，それ程極端でないにしろ，同じく挑発的な，命題を使って我々は世界について真なことを云うことはできるけれど，実在するものを指示するか分らない，だから「指示」の概念など捨ててよい，というデーヴィドソンの考えである(3)．又，同じく最近「指示」について様々な，保留をしているパトナムの否定的な考えである．私はデーヴィドソン同様，ことばが指示するものを理解することは命題の真理条件を理解することと不可分と思うけれども，それだからと云って，指示について語ることが不可能になるとも考えぬし，まして，「指示」の概念を捨てるべきなどとは思わない．逆に「指示」は語を使うものの根本概念の一つであることを弁護したい．そして，それを明らかにするために，アナクロニズムだと思われるかも知れないが，ヴィトゲンシュタインの「論考」の幾つかの示唆に富んだ文を考察したいと思う．

2. 一般命題と単称命題

パトナムは，1979 年，通常考えられている程，言語理解の理論は，指示理論や真理理論と関係があるわけではない，と主張した(4)．だから，ヴィトゲンシュタインは（命題の意味に関する）像(ピクチャー)の理論と，（ことばの用法を通

して意味を理解しようという）意味の用法説とを両方唱えたのだとパトナムは云う．明らかに，パトナムは『論考』の像の理論は指示と真理の理論であり，『哲学探究』の用法説は言語理解の説だと見做しているのである．

同様に，R・ローティーは，彼が「協力性（ソリダリティー）」と呼ぶものを，「客観性」と呼ぶものと対照させる．彼が重要視する「協力性」とは一つの文化に属する者達又はグループのもの同志の相互の理解，そして共通の意見の追究であり，それに基く，他人の意見の理解を拡げようとする努力である．

彼が否定する客観性とは，我々の考えの真理値は客観的な根拠を持つということである．ローティーは，この様な客観性の概念は，人間の考えと，人間の考えと独立に存在する事実が対応するとかしないという主張だとする．そして，我々は人間の考えの外に脱出することは出来ないから，我々が把握することの出来ぬ対応を想定しているのだという．そういう思い込みを捨て，人間の相互理解と共通の意見にだけ焦点を向けよう，というのである(5)．

しかし，パトナムが言及したヴィトゲンシュタインの場合を考えると，像の理論が，注目に価する面白いものであるのは，それが，言語理解と緊密に関係しているからだと思われるし，意味の用法説が，（理解されることばとは，用法をもつものだという）単に常識的な，誰もが受け入れられる説でなく，挑発的で，深い考えであるのは，それが指示に関する考えと繋がっているからだと，私は確信している．この点に関する誤解が，前期ヴィトゲンシュタインと後期ヴィトゲンシュタインの思想の間に断絶を見るという哲学史的な誤りのみならず，指示や真理の概念が，我々と，我々の考えや観念と独立に存在を確証されたものとの対応を想定する，という重大な哲学的な誤りの原因となっているのではないかと思うのである．

『哲学的探究』393節に「あるものがどの種類のものなのか文法が教えてくれる」という文がある．文法は人間の約束ごとなのだから，文法がものの性質を反映することなどあり得ず，文法から，ことばが意味するものの

種類が，規定されるわけはない，と思われるかもしれない．しかし，ヴィトゲンシュタインがここで論じている自然言語の論理的文法とは，人が簡単に変えることが出来るものではなく，公けの言語を習うことによって習得するものである．問題となっているのは，あるものについて語るとき，対象がどんな範疇のものであるのかを捉えねばならぬことであり，指示説，少くともその重要な一部である．他方，用法説とは関係がないと見做されている『論考』で，ヴィトゲンシュタインは既に次の主張としているのである．

「記号（ツァイヘン）がどの様な役を演ずる（シュムボール）記号であるかを知る為には，意味ある（命題中での）用法に注目せねばならない．」3・326.

「ある記号が何の役にも立たぬことは，それが何ものをも意味しない (bedeutungslos) ことだ．これが，オッカムの箴言が言わんとしたことである．全てが，ある記号が何かを意味するかの如く振舞うならば，その記号は意味をもつ．」3・328.

ここの「記号が演ずる役」とは単に統語的な役割を指すのでなく，世の中で使われることばとして演ずる役割のことである．あることばが何の役割も演じないならば，つまり，そのことばが必要でないなら，我々は，そのことばが意味するものは何もないと帰結してよいというわけだ．しかも，これが「必要以上に存在するものを増やすな．」と書いたオッカムの箴言が云わんとしたことはこれだと説明していることからわかる様に「何ものも意味しない (bedeutungslos) とはナンセンス (sinnlos) のことではなく，何ものをも指示しない，という意に解釈されるべきである．

指示と理解の関係をよりよく把握する為に単称命題と一般命題の違いと相互関係について考えてみよう．我々が，廻りの世界を描写するとき，二つの異なるやり方がある．一つは一般命題を用い，すべてを出来るだけ一般語を使って描写する方法，たとえば，「真上に星がある．」「大きな星だ．」「弦楽四重奏が聞こえる．」「生き生きと弾いている．」等と云うこと．もう

一つは，単称命題を用い，固有名詞を沢山使って，名指したものに述語で，色々な性質を帰属させる方法．たとえば，「オリオン座のアルファが真上にある．」「モーツアルトのプロイセン弦楽四重奏二十二番，ケッヘル 589 が聞こえる．」「ベルグ弦楽四重奏団が弾いている．」と云う様に．この二つの描写のやり方にはどういう違いがあるだろうか．

一般命題を用いる場合，私が云うことは，違う場所の，似た事象にも当てはまるかも知れない．たとえば，同じ大きさの別の恒星が真上にあるとき，又は異なる弦楽四重奏団が弾いているときなど．どの様なものが見えるのか聞こえるのかを，述べているだけからだ．これに反し，固有名詞でものを名指し，単称命題を用いる場合には，私の云うことは，ここで知覚している一つのものについて語っているのであり，世界の中の特定のものと私のことばは繋りをもつ，といえる．だから，従来，『論考』の像の理論は，名と対象を直接的な指示関係で繋げ，ことばと世界を結ぶ，と見做された，又，ダメットも，著名な，『フレーゲの言語哲学』の中で，「フレーゲの指示の説の実在主義的要素は，名前と，名前を持つものとの関係を，指示関係の原型と見做すことから来ている．」と書いている(6)．その理由は，固有名詞や，呼称を人や物にあてがうとき，名づける人は，名をもらう人や物を眼前に知覚しているわけであり，指示関係の成立の為には（知覚という）因果関係が名指される人や物との間にある，と云うことらしい．

固有名詞と個物の繋りに加えて，1960 年代おわりから 1970 年代にかけて，水とか金といったいわゆる自然類（ナチュラルカインド）とパトナムが呼んだものとその呼称との繋りも，ことばと世界との結びつきを保証する留金の様なものと見做される様になった．例えばパトナムは「だから，自然類を指すことばの場合も，それを使いこなす能力とは，そのことばを当てがった時の事に関する我々の知識，及びその事件との因果的つながり，（そしてひいてはことばが指す類のものとの因果関係），に拠るものだ．」と主張する(7)．

その様な因果関係は，我々がどのものを名づけたかを規定し，我々のこ

とばを，世界の中の特定のものに繋げる，ということなのだ．クリプケをはじめ，この様な考えを持つ哲学者は最近相当いるが，果してそうであろうか？

直観的に納得出来ない理由は幾つかあるが，先ず第一に，我々は知覚出来ぬものを名づけることが出来ることである．たとえば，「もうじき生れる子を「ゆき」と呼ぶことにしよう」と決めることがある．これは将来ゆきと名づけようと云っているわけでなく，今，名づけていると考えてよい．因果関係に依存せずに，どの子供を指すのか同定出来たのである．

第二に我々が使っている大部分の自然類の名及び固有名詞を考えるならば（たとえば，「クレオパトラ」にしろ「水」にしろ，）我々はそれが導入された最初のときのことも，用法が受け継がれた歴史をも知らない．だから，名づけた時に存在したという因果関係への依存が意外に感じられるのだ．

第三に，我々が，独立に存在する世界を信じさせられるのは往往名もないものを前にしてであり，海岸の砂や，夜空の銀河を眺めたときである．我々の「実在論」的な感慨は，屢，存在的量化記号を含む一般命題で表される．しかも，星も砂も自然類であるとも思われないのである．

3.　単称命題とレアリズム

単称命題が，ことばを世界に結ぶ留金の役をすると考える哲学者は，名前を持たぬ個物も，原則的には指示代名詞で指示することが出来るといって，自分の立場を弁護するであろうと思われる．バートランド・ラッセルは，「これ」「あれ」の様な指示代名詞こそ，確実に個物と結びつけられることが出来るから，真の「論理的固有名詞（ロジカリプロパーネーム）」だと考えた．又，ストローソンとトゥーゲンドハットは，一般命題に使われる述語を理解するには，それが具体的にあるものに帰属されたときに，そのものはどういう状態にあるかを把握することであるという[(8)]，だから，「猫がいる」という様な命題を理解するには，名前はないにしろ，一匹の動物を指して「これは猫だ」と

いうことの真偽をきめることがどういうことか理解できねばならない，とする．時空的な世界の中で指示代名詞を使って個物を指示することが，この二人の哲学者にとって，世界の描写の，そして世界の把握の基礎にある．

多くのヴィトゲンシュタインの注釈者達も「論考」の像(ビルド)の説，特に，次の文章が，ことばと世界は単称命題の中の名前を通して世界と結びつくのだと唱えている，と受取って来た．

2•1514　写像の関係とは像の要素とものとの対応から成立つ．

2•1515　これらの対応はいわば像の要素がもつ触角であり，これによって要素は現実に触れるのである．

3•203　名は対象を意味する．

3•22　名は名題の中で対象を代表する．

これらの文章は，我々の観念や言語と独立する世界のものと，名前とを結びつけ，この操作を通して作った要素命題，つまり尤も単純な単称命題を，現実の事実と対決させ，真偽を決めることが出来ることを示すと思われて来た．しかし名とものが対応する，又，その対応を通してことばが現実に触れるとはどういうことだろうか．後で見る様に，たとえば，デーヴィドソンが指示が可能かと問うときとローティーが問うとき，全く違うことを疑問にしている様に思われるのである．

我々は波止場に繋げた舟と，繋げられずに湖に浮んでいる舟の区別をつけることが出来る．明らかに，ことばを世界の中の物に結わくことは出来ない．印刷したことばは既に世界の中のものの一部であり，普遍としてのことばは，物理的事象と因果関係を持てる様なものではない．それらは規則に従って用いられ，統語を持ち，色々な事態を表現する，しかし，「世界に触れる」とか物を指すということは，メタフォアでしかあり得ない．つまり，慣習によって，そのことばが，我々が経験し，或は考えることの出来る物を指すものとして使われている，という事実以上の結びつき方はな

いのである.

だから，先に引用した『論考』の文は，ヴィトゲンシュタインが，単称命題や名が，現実と特権的な接触の仕方をしていると考えたことは示さない．次の『論考』5・526を読めば明らかである．

「世界は，完全に一般化された命題によって描写することが出来る．つまり，特定の対象に，最初に名前をつけることなどせずに描写出来る．そしてその様な写描から普通の言い方にするには，『かくかくしかじかの X が一つ，かつ唯一，存在する』といった表現の後に『そしてその X は A である．』とつけ加えればよい．」

ここでは，この世界のものについて単称命題だけでなく，一般命題だけで充分に語ることが出来る，と説かれているのみでなく，単称命題の使用は，確定記述を含んでいる一般命題の使用を前提とすることがヒントされている．(勿論このことは，名の意義が何かの確定記述と同じだと云っていることではない．せいぜい名があるものを指すのに用いられるなら，そのものがどれであるか確定記述で示すことが出来ると説いているだけである.)

たとえば，北の夜空を眺め，人が北極星の方向を指すと考えよう．

「一夜のうちに，他の星は A を中心に廻る．A は延長のない点だ．」というときと，「A は私の視界の中心にある白い点だ．視界には沢山の点がある．」というときと，「A は恒星だ，A は二等星だ．」と云う場合とでは A は違うものである．最初の命題では星の位置であり，延長のない幾何学的点である．二番目の場合は視界の小さい可視的なマークである．三番目の場合は恒星であり，しかも二等星などという性質は，地上から夜星を人間が見ることによってのみ意味のある述語であり，星自体の大きさだけ，又は光度だけで決るものでない．指せば，全く同じ所を指すわけだから，「あれ」と云って指しただけでは何について語っているのかわからない．しかし，各の命題で，「A」という名はそれぞれ異なる対象と，はつきり

対応しているのであり，これらの命題は真理値をもつのである．

何かのある方向を指しながら，同時にことばを云うだけでは，ことばの意味を定めることは出来ないと，ヴィトゲンシュタインが，後に「哲学探究」で書いたことはよく知られている．「論考」の名と物との対応の理論の背景としても同じ様なことが書かれていることは，ヴィトゲンシュタインの伝記の為でなく，ことばの指示と，命題の理解の関係を明らかにする理由で面白いと云えよう．

4. 対応と指示

18 世紀の箴言家リヒテンベルグは，我々が感情をことばで表現しようとするとき，音楽をことばで表現するときと同じ困難さを体験すると書いた.(9) リヒテンブルグに云わせると感情という主題とことばが余りに異質だから，というのである．彼が指している事象は理解できるけれども，この説明はおかしい．ことばというものは，気候の様な散分的なものであれ，幾何学の様な抽象的なものであれ，描写するものと同質ではない．勿論言語的な物を描写するときは対象と，描写の道具として使うことばは同質でありうるが，うまく描写できたか，うがったことを云えたか，は同質性とは何の関係もない．感情をうまく描写するのが，たとえば家を描写するよりむつかしいなら，そのむづかしさは別のところから来ているのである．

ことばと対象の同質性と同様に，「ことばと対象の対応」といわれる概念も誤解を招き易いものである．特に哲学者が，ことばとものを比較することに基くものと考える「対応」の概念を理解するのはむづかしい．

たとえば，パトナムは，彼が強い実在論的(レアリスト)立場を放棄したのは，ことばが特定の対象と「対応する」という考えに困難を感じたからだと書いている．更に，「対応」の概念がむづかしいのは，「我々は決してイメージやことばを対象と較べたりせず，イメージやことばは他のイメージやことば，考え，判断，などとしか較べたりしないからだ.(10)」と書いている．しかし，

先に『論考』からの引用文に関連して書いた様に，ことばと物が対応するか否かは用法の約束ごとの問題でしかない．だから，ことばとものを較べることの奇妙さを指摘することは，正しいけれども，何故，これが対応の観念，そして指示の観念を放棄する理由を示すのか分らないのである．

数字について考えてみよう，アラビア数字，漢字，ローマ数詞などで書くことが出来る．たとえば「II」「二」「2」といった記号が，二という数と対応するということは，それらが記号体系の中で，ある規則を持って使われ，数える行為や，算数の基本操作によって規定出来る基本概念を指示することである．2 が何であるかも，この様な算数の規則と独立に定めることは出来ない．しかし，数字の言語と独立に二という数の正体を把むことが出来ないことは，それが，ことば，たとえば「2」というアラブ数字と対応することを些かも否定しない．所が，パトナムは，ことばが特定の対象と対応するという観念に無理があるのは，対応する対象がすべての思考的体系と独立に存在すると考えられているからだ，と説明している．

ローティーも又，人間が客観的な真理を知ることを可能にする様な本性を持つと考える人に反対し，その様な考えは我々の属する種を，「非人間的実在と繋げる，非生物的な何ものかを所有していると考えることだ」と書いているのである.(11)

しかし，少くとも近年の言語哲学で指示とか，対応とかについて語ったフレーゲ，ヴィトゲンシュタイン，タルスキーなどは，その様ないかなる思考体系とも独立で，非人間的な対象とことばの対応など考えていない．事実は逆で，対象とは，本来，それの個別化を可能にする観念と緊密な関係をもって把えられるものである．先の，星の位置である幾何学的点という対象，視界の小さい白い点としての対象，恒星という対象，というそれぞれ異なる対象の例でわかる通り，どの様な概念の体系とも独立に同定される対象などありえぬし，ことばがあるものを指示すると人が考えた場合，その様な，神秘的な，an sich について考えていたわけではないし，

考える必要もないわけである．指示対象が我々と独立に存在する，ということは，単に，対象について人は間違った考えを持ちうること，つまり，その対象についての命題の真偽と，誰かがその命題の真偽についてどの様に考えているかは，区別することが出来ることである．

ことばと現実の比較について哲学者が語ったとき，もう一つ別の意味で理解されたことがある．たとえば，『論考』4.05 で，ヴィトゲンシュタインは「命題は現実と比較される．」と書いている．それによって命題は真であったり偽であったりすることが理解されるというわけである．ここで重要なのは，比較されるのは厳密に云って，ことばと現実ではなく，ことばで云われたことと現実である．

「山田太郎は勇敢だ．」という日本語を，現実の人間の性格と比べるのでなく，この文が述べている事態，つまり可能な事態を，現実の山田太郎の性格と較べるのである．丁度キャンヴァスの肖像を見て，これは山田太郎に似ているというとき，この平面の文様や線を，人間の様相と較べているのでなく，キャンヴァスに描かれた人間，例えば，中太りで小心そうな人間を，痩せて勇敢な現実の山田太郎と較べているのである．この場合は特に，如何なる観念体系とも独立な対象を，ことばや思考と較べる，などということは想定し得ぬし，問題となったこともないわけである．

指示関係で正当な困難をもたらすのは，ことばで云われたことと，又は肖像画に描かれたことが，二つ以上の対象に当てはまり，どれについて語り，描いているのかはっきりしないときである．これは，クアインなどによって盛に論ぜられた規定の不充分さ(アンダーディターミネーション)の問題であるけれどもこれはせいぜい，時には，指示されるものが何であるかが曖昧だという事実であり，指示や対応概念の本質的な不整合性などの問題ではない．

5.　因果関係と指示

ヴィトゲンシュタインは全作品を通じて，ことばが意味する (bedeu-

ten）するもの，はそのことばの使われている命題を理解することと切り離して論ずることは出来ないと考えた．命題を理解するとき構成要素も，分らねばならぬならば，これは循環論法ではないかと人は疑って来た．しかし全体の意味と部分の演じている役割が同時に把握できることは，ことばの命題のみならず，絵にしろ，音楽にしろよくあることで，私は不可解なことではないと思われる．しかし，命題の理解は構成することばが指すものを把握することによって出来ると信ずる人にとって指示対象が何なのか，曖昧であるときに，因果関係を持出す理由は理解出来る．

たとえば，写真に見えるものから，山田太郎の写真であるのか，双子の兄弟の写真であるのかわからぬとき，我々は，この写真がとられたとき，カメラの前にいたのはどちらか，と因果的な関係を探る．一昔前のパトナムや，その影響下にあった多くのアメリカの科学哲学者は，指示の規定の不充分さを補う為に因果関係を導入した．つまり，言語的能力というものは，一群の正しい信念をもつことにのみ依存するのでなく，ことばの導入のイヴェントと正当な因果関係に立っていることにも依存すると考えられた．だから，因果関係をいくら細かく指摘しても，指示対象を必ずしも規定出来ぬことがわかったとき，パトナムは指示の概念を捨てようと云い出した．デーヴィドソンも，ローティーも指示を放棄する方向に動いた．

私は，曖昧な指示があることは，指示の概念を捨てる利由にはならないと信じる．我々は一つの世界にしか存在しないのだから，ことばが違う可能世界で，違うものを指示しえたとしても，一つしかないこの世界で指示に成功せぬことにはならない．

デーヴィドソンは，フレーゲやヴィトゲンシュタインと同様，ことばが指示するものを理解することは，ことばが構成している命題の真理条件を理解することと不可分であると考える．それにもかかわらず，1977 年に発表された論文では，時流に流されてか，指示の可能性を否定し，指示の概念さえ捨ててしまうことをすすめる.(12) デーヴィドソンは，ローティーのよ

うに客観性や実在や真理を捨てようというのではない，最近のパトナムの様に，実在を「内的実在」と呼ばれるものにすり替えようというのでもない．それにもかかわらず，実在と真理を保持しながら，ことばによる実在するものの指示は諦めるという不思議な立場をとる．最後に，デーヴィドソンの用いる一つの論議を考察し，ここで書いて来たことの結論としたい．

命題の真理と，ことばの指示の理解は不可分だということは，決して，全ての命題の真理条件を教えてくれるものではないし，ある名詞が何を指示するかを示すものでないし，対象が，特定の述語に該当する規準を教えてくれるものではない．デーヴィドソンが重要視するタルスキーの真理定義の規準が，個々の文の真理条件を教えてくれないのと同様である．

それにもかかわらず，デーヴィドソンは，従来，指示なしに過すことは出来ないと唱えて来たにかかわらず，何故「指示と共に過すのに抵抗を感じなければならぬ．」と考えるかを説明する．「指示」の概念と共に過すとは，指示の概念を，言語論と独立に解釈することだ，と彼はいう．しかも彼がいわんとすることは，「指示」が他の意味論的な概念を用うることによって説明出来るか否かの問題ではなく，指示が，言語に関する説と，言語論以外の方法で把えられた事象，行為又はもの，との接点であるか否かということだと説明する．

既に見た通り，ことばは因果関係の様な直接的な関係で世界の中の物や事象と結びつくことは出来ないものである．何故，デーヴィドソンは，命題の真理を通して間接的にしかことばが何を指示するかが定まらぬということをもって，ことばがものを指示すること自体を否定するのであろうか？　真であったり偽であったりする命題は，色々なものや事象について何かを述べる命題ではないのか？

不思議なことに，デーヴィドソンは，自分は指示は放棄するが，存在論（オントロジー）は放棄しない，という．ことばが何を指すかを問題とせずにどうして，実在するものや出来ごとがあると云えるのか？　デーヴィドソンが指示を存

在論と別あつかいにするのは，指示されるものとは，「理論的存在」であり，全体の説に整合さえすれば，いくつもの理論が可能であるから，それが存在するとは主張出来ないのだというのである．ここには，知覚の様な直接的な因果関係を特別あつかいにする 18 世紀の経験論（たとえばヒュームやコンディヤックの経験論）の伝統がいまだに見られる．しかし，我々が考えたりする多くのことが知覚可能なことでなく，経験的なことさえ，知覚と極めて複雑な関係に立つものである以上，間接的に指示物が定められることをもって，真の指示ではないとするのは間違いである．又，世界を，いくつもの違う記述の体系で描写できるということも，一つ一つの描写で，指示されるものが存在しないことを意味しない．命題の理解は，何を指してことを述べているかの把握に依存する以上，指示は真理と同じくことばを世界と繋げるものであり，しかも命題の真理も指示と同様にデーヴィドソンの云う全体論的な側面を持つのである．その意味で，双方とも理論的存在でもあるのではなかろうか．(13)

注

（1） Hilary Putnam, Hartry Field, Michael Friedman, Saul Kripke, Richard Boyd. 等，一連のアメリカの哲学者によって主張された．

（2） Gareth Evans, *Varieties of Reference*, Oxford University Press, 1981, 2章，4章，8章．

（3） Donald Davidson 'Reality without Reference', *Inquiries into Truth and Interpretation*, Clarendon Press, 1984.

（4） Hilary Putnam, 'Reference and Understanding', *Meaning and Use*, A. Margalit 編, Reidel, 1979.

（5） Richard Rorty 'Solidarity and Objectivity' *Post Analytic Philosophy*, John Raychman, Cornell West 編, Columbia University Press, 1985.

（6） Michael Dummet, *Frege Philosophy of Language*, Duckworth, 1973 & 1981, p. 4.

（7） Hilary Putnam, 'Explanation and Reference' *Mind, Language and Reality*: (Philosophical Papers Vol. 2) Cambridge University Press,

1975. p. 205

(8) Ernst Tugendhat *Vorlesungen zur Einführung in die sprachanalytische Philosophie*, Frankfurt 1976, (英訳 *Traditional and Analytical Philosophy* Cambridge University Press, 1982). Peter Strawson 'Singular Terms, Ontology and Identity', *Mind* 65, 1956.

(9) Georg Christoph Lichtenberg, 'Über Sprache und Worter' *Aphorismen*, 1778.

(10) Hilary Putnam, 'Realism and Reason' *Meaning and the Moral Sciences*.

(11) Richard Rorty, 'Solidarity or Objectivity', p. 13, 同上.

(12) Donald Davidson, 'Reality without Reference' *Inquiries into Truth and Interpretation*, Clarendon Press, 1984.

(13) 此の文の第三節は "Die Beziehung zwischen Welt und Sprache" という題で，1987年に Nurnberg 大学のヴィトゲンシュタイン生誕100年紀念シュムポジウムで講演し，*Im Brennpunkt*: *Wittgenstein*, B. McGuiness 及び R. Haller 編. Rodopi, Amsterdam, Holland 及び Atlanta, U.S.A., 1989 に出版されたものの一部と重なる.